２０１８．４．３０

大草

読書メモ

83．安満利麿「仏教と日本人」筑摩書房（2007.5）

84.　島薗進「日本仏教の社会倫理」岩波書店（2013.9）（再掲）

85.　「根本法華経見聞」（）

86.　立松和平「良寛　行に生き行に死す」春秋社（2010.6）

**＜安満利麿「仏教と日本人」から＞**

地獄の概念を理解するため、この本の中の往生要集の地獄についての記載を抜粋した。

地獄には、以下の八種類の地獄がある。

①等活地獄　②黒縄地獄　③衆合地獄　④叫喚地獄　⑤大叫喚地獄　⑥焦熱地獄　　　　⑦大焦熱地獄　⑧阿鼻（無間）地獄

１．等活地獄（殺生の罪を犯した者が堕ちる地獄）

　因果応報の思想が生きている。殺生の罪の報いが消滅すれば、他の罪の報いを受けるために他の地獄に行く。人間世界の下、千由旬（１由旬は14.4Ｋｍ。地下14400ｋｍ）にあり、縦1万由旬（144000ｋｍ）、横1万由旬の広さがある。

　等活地獄に堕ちた罪人は互いに相手を害する心を懐いている。鉄の爪を持って相手とつかみ合い、裂き合い、これを繰り返し、骨だけになる。鬼が現れて、罪人の頭から足まで粉々に打ち砕く。あるいは、鬼は鋭利な刀でもって罪人の肉を裂く。涼風が吹くと罪人の身体が元に復活する。空中に声がして「等しく甦れ」というと、罪人は甦り、再び同じ苦しみを受ける。または、鬼が「生き返れ、生き返れ」と叫ぶと罪人は甦り、同じ苦しみを味わう。

２．黒縄地獄（殺生と盗人が堕ちる地獄）

　等活地獄より下にあり、広さは同じ。罪人は熱鉄の地に転され、熱鉄の黒縄でまかれその黒縄にそって熱鉄の斧で切り裂かれる。

３．衆合地獄（殺生と盗みに加えて、性欲にとらわれた人間が堕ちる地獄）

　黒縄地獄の下にあり、広さは同じ。牛や馬の頭をした獄卒が、罪人を鉄の山に追い込む。鉄の山で罪人を打ち砕き、血が地面に満ちる。又は、鉄の山が罪人を押しつぶし粉々にしたり、鉄の臼に罪人を投げ入れ鉄の杵で突く。鉄の炎をはく鷲が、罪人の腸を取り、樹にかけて食らう。

　樹の上には美女がいて、罪人を招くので、罪人は誘われて樹に登るが、樹の葉は刀のごとく鋭利で罪人の肉や筋を切り裂く。頂上に出ると、美女は樹の下にいてまた誘う。罪人は、下に降りようと下がっていくと刀のような葉が向きを変えて、罪人の身体を切り裂く。この繰り返しが、百千億年続く。

４．叫喚地獄（殺生、盗み、性欲、更に飲酒の罪人が堕ちる地獄）

　衆合地獄の下にあり、広さは同じ。獄卒は、頭が金色で眼から火を出す。罪人は熱鉄の地面を走らされ、熱湯の釜で茹でられ、鉗子で口を開かれ、たぎる銅を飲まされる。自己の悪行を棚に上げて、哀れみ（慈悲）を乞うという。（高橋和巳の「悲の器」は、この訴えの言葉からとられている。）

５．大叫喚地獄（殺生、盗み、性欲、飲酒、更に妄語の罪人が堕ちる地獄）

　叫喚地獄の下にあり、広さは同じ。鬼は、熱鉄の鉗で舌を抜くが、また舌が生じる。生じるとまた抜かれる、この繰り返し。全ての苦しみが、10倍になって迫ってくる。

６．焦熱地獄（殺生、盗み、性欲、飲酒、妄語、更に邪見の罪人が堕ちる地獄）

　大叫喚地獄の下にあり、広さは同じ。以下（焦熱の苦しみ）略。

７．大焦熱地獄（殺生、盗み、性欲、飲酒、妄語、邪見、更に戒律を守る尼僧を汚した罪人が堕ちる地獄）

　焦熱地獄の下にあり、広さは同じ。以下（苦しみは、今までの10倍）略。

８．阿鼻（無間）地獄（5つの大罪+因果の教えを否定し、仏教を誹謗し、あるいは信者の布施をむなしく貪る出家者たちが堕ちる地獄）

　一番下にある地獄で、広さは同じ？一瞬の休みもなく苦に苛まれる地獄。

源信の意図は、人々に地獄の様を見せて、それらの苦から苦のない浄土へ人々を誘うことにあった。しかし、その描写があまりに凄惨であり現実味を帯びていたため、地獄の様が独立して人々の間に浸透したという。

（大草の感想：このような地獄を示すことが、そのような地獄に落ちないように行動しようという道徳観や倫理意識の醸成にある程度は効果があったといえよう。）

**＜島薗進「日本仏教の社会倫理」から＞**

　・日本の仏教界の場合、社会倫理的な実践がなされても仏教学からの社会倫理思想の踏み込んだ考察は乏しく、社会倫理的実践を支える思想的な力が微弱である。仏教の社会倫理的実践について研究に取り組んでいる学者はいても、仏教研究の本流からはずれており、文献学の本流研究との交流が豊かでない。いきおい、社会倫理的実践と宗教思想との結びつきが弱くならざるを得ないのだ。

　・共生の構造（石井　1969年　174頁）から。サンガ（出家者集団）は、①出家者の自己救済達成の効率化を目標とする機能集団、②仏教的価値の具現体=「福田」である。そして、このサンガを物質的に支持するのが在家者の宗教=「タンブン」の宗教であり、また、サンガは、在家者の宗教にブン（功徳又は福）を与える関係にあった。

　・仏教は、はじめから「社会参加仏教」であった。

　・そもそも、浄土教が優位を占めることと政権が仏教に距離をとることは、相関関係にある。法然は、国家社会での「正法」の支配を目指す仏教から、国家社会はさておき、とにかく個人の極楽往生を目指す仏教への転換をラディカルに主張した。

　・つまり、鎌倉期の「慈悲の道徳」こそが、日本仏教の独自の倫理思想の現れとして屹立するものだという理解だ。

　・鎌倉仏教運動以後、祖師崇拝本末関係が強力に展開し、日本仏教の宗派主義的傾向が露わになっていく動向に早くから注目していたのは和辻哲郎であった。和辻は、封建的な主従関係とともに形成されてきた人と人との間の強い信頼関係が鎌倉仏教の教えに反映していると見る。

　・では、「現代仏教学」は何を目指すのか。仏教と倫理、宗教と倫理の関係について考察することが、その要と考えられているようだ。末木の理解するところでは、倫理とは「人の間」つまり「人間」のルールに関わるものだ。他方、仏教などの宗教は、「人の間」を超えた領域に関わるところに成立する。

　・宗教とは、「人の間」を超えたものと、「人の間」との緊張関係において、両者を結び付けるところに成り立つ。「人の間」から、それを超えた世界への逸脱を教えると同時に逸脱しっぱなしではなく、それを再び「人の間」に取り戻そうとする、その両者の境界線上における緊張関係に宗教が成り立つ。これが、「倫理」と「宗教」との境目ということになる。倫理は、人と人との間のルールを示すもので、言葉で表現できるものだ。これに対して、宗教は、ルールによる関係が通用する「人間」を超えた「他者」に関わる領域の事柄だと末木はいう。

・末木の仏教者の分類

第一分類：本来の仏教を尊び正法を高く掲げ、戒律を重んじた上、民衆への奉仕も行った人達。（最澄、空海、道元、叡尊、行基、忍性、明恵、栄西など。）

第二類型：無我の境地を体現するような人達。（桃水、雲渓、良寛など。）

第三類型：主観的観念的遊戯にふけり、実質的には何も民衆を助けなかった人達。

（法然、親鸞、日蓮など。）（大草：この分類には疑問アリ。法然、親鸞、日蓮ともに民衆を救ったのではないか。明恵は法然を批判した。）

大四分類：教理の知識は二の次にして、ひたすら民衆の幸福のために尽力した人達。

（空也、一遍など。）

**＜「根本法華経見聞」に関連して＞**

・この本は、京都曼殊院にある天台宗の僧が代々口伝で教えたもの、ロイという内容を記したもの。ロはくち、イは伝えるという字の略字。

・生まれるには、依報の色（氷）として顕れた相（すがた）で、死ぬとは正報の色（氷）が、依報の空（水）に帰った本性なり。乃ち、生死一如迷悟不二、依正一躰だと説いている。例：氷は色、寒は縁、水は空であるという。水は空とし、寒を縁起し、氷という色となる。

・勝範という名前の僧いわく、生は仮、死は空、存在の間は中道と説く。（天台思想である空、仮、中の三諦の思想に通じる。）

・伝教大師は、「生がもし実の生ならば、生じて滅すべからず」という。（実の生とは、真実、絶対の生ということ。）同じように、死が絶対の死ならば、死んで生まれるということはない筈だと説いている。

・全ての存在は、因縁によって生じるので、それ自体がないから空である。これを空諦という。空というのは仮に名付けられたものであり実体がなく、縁によって仮に存在しているものだから仮諦だという。あらゆる事象を仮のものとして肯定するのが仮諦の立場である。空諦は常識的立場の否定である。

・全ての存在は、空と仮にわけて考えるべきでなく、空と仮が常にからみあって同時に存在すると考える立場を中諦という。否定し、肯定し、その両方を認めるのが中諦である。（それは言葉や思慮の外のものである）この考え方を一心三観ともいい、天台思想の中心となっている。

・虚空そのものは不生不滅で、いつでも私たちの上に広がっている

けれども、霞が起こって雲と聳えれば生であり、見る人によっては馬に見えたりする。それらが消え去れば滅となります。雲が過ぎ去り消えれば、馬も船も幻想にすぎなかったのです。心が空寂で般若の智慧に満たされた大虚、即ち悟りの心には、迷いの雲の一片も生まれないので、不生不滅だとこの本には説かれています。

**＜立松和平「良寛　行に生き行に死す」から＞**

・道元の「正法眼蔵」にいたく感動した良寛は、「夜読永平録」に以下のことを書いた。

「寂寥を慰めんと欲するも良（まこと）に由無く

暗裏模索す　永平録

幽窓の下　書案の上

香を焚き　燈を点じて正に拝読す

身心脱落は唯だ一実のみ　（身心脱落※これが唯一の真実である。）

千態万状　龍玉を弄ぶ」（道元は龍が玉を弄ぶように高僧の例を引いて説いている）

　※身心脱落とは、身からも心からもとらわれが無くなる境地のこと。

・また、良寛54歳のときの詩集に「草堂集貫華」と題する詩がある。

「予　游方すること殆ど二十年

　今茲（ことし）郷に帰らんとして伊東伊川に至る

　体中不豫なれば、客舎に寓居す（健康を害したため旅館に泊まっていた）

　時において夜雨蕭々たり　（夜の雨が寂しい音を立てて降っている）

　一衲一鉢わずかに是れ随い（一衣一鉢だけを持って）

　病身を扶持して強いて焼香す（やっとのことで焼香読経をすませた）

　夜雨蕭々たり蓬窓の外

惹（ひ）き得たり廿年羇旅の旅（異国生活20年、我が身の旅情がかき立てられる）

孤峰　独宿の夜　雪雨りて思い梢然たり（ものさびしい思いがする）

玄猿山椒に響き幽澗潺湲をやむ（猿が鳴き、谷川はせせらぎの音もしなくなる）

虚壁燈火凝り匡牀（きょしょう）硯氷乾く（壁に燈火が動かず映り硯の水が凍ってる）

明発寝ぬる能わず　筆を呵して強いて篇を成す（筆先に息を掛けやっと詩を作った）」

・良寛は、深い孤独を抱えていて、何もかも捨て去り、自在さを手に入れた。

・良寛の短歌

＜形見とて　何残すらむ　春は花　夏ほととぎす　秋はもみじ葉＞

この歌は、道元の次の歌を基に詠んだもの（道元とともに生きた良寛の生涯）

＜春は花　夏ほととぎす　秋は月　冬雪さえて　すずしかりけり＞

・良寛の短歌

＜良寛に　辞世あるかと　人問わば　南無阿弥陀仏と　言ふと答えよ＞

・良寛の終わるに臨み、還座してみな遺偈（ゆいげ）を乞う。師すなわち口を開いて阿と一声せしのみ。端然と坐して化す。実にこれ同暦二辛卯正月六日、世寿七十四、放臘（ほうろう）五十三なり。

・阿とは、阿吽（あうん）の阿であり、梵語の第一字母である。阿という字は万物の根源の象徴であり、不生不滅の原理を示している。この阿こそ、良寛が不生不滅の涅槃の世界に入ったことを象徴しているのではないか。涅槃とは死を現象としているが煩悩の最後をきれいに燃やし尽くした悟りの境地である。良寛は、阿と一声をして仏になったのである。

・身心脱落とは？と道元が師の如浄（宋の僧）に質問する。如浄は、「身心脱落とは座禅なり。只管に座禅をするとき、五欲（財、色、飲食、名誉、睡眠）を離れ、五蓋（（貪欲（とんよく）、瞋恙（しんに）、睡眠（すいめん）、掉悔（じょうけ）、疑）を除くなり。道元はさらに質問する。五欲を離れ、五蓋を除くというなら、経典によって教えを説くのと同じではないのか？師、如浄曰く、「只管に打座して交夫を作し、身心脱落し来るは、すなわち五蓋・五欲を離るるの術なり。この他にすべて別事なし」

（五蓋とは、修業を害する５つの障害（=煩悩）を指す。掉悔は掉拳（じょうこ）ともいい、心が落ち着かないことを指す。）

・良寛は一つ一つ捨てて行き、すべてのとらわれを離れて身も心も自由になる境地、さとりの境地、そしてすべてのものを自然に受け入れる自在さを身に着けているーーーこういう状態が身心脱落であり、只管打坐によってのみ得られると説いている。良寛は生涯修業を続け、探し求めていたあの龍の顎の下の素晴らしい玉（=真理）も苦労して手に入れてみれば、そこらじゅう玉（=真理）でないものは何もないことを覚ったのである。

**＜言葉・・・旅立ちを表す言葉＞**

死亡、死去、死ぬ、死没、永眠、あの世行き、逝く、往く、息を引き取る、消える、　　往生、隠れる、薨去、鬼籍に入る、事切れる、従遊、崩御、登遐（とうか）、薨る　　、即世、逝去、遷化、散華、地獄に堕ちる、天国に行く、去る、他界、終う、終わる、　　辞世、成仏、落命、絶命、入滅、禅定、亡くなる、消滅、滅す、昇天、召天、不幸、　　　　世を去る、仏になる、没する、先立つ、旅立つ、涅槃に入る、不帰の客

**<永田和宏ほか「僕たちが何ものでもなかった頃の話をしよう」から＞**

　山極壽一（京大総長）と永田和宏（細胞生物学者、歌人）の対談「おもろいことやろうじゃないか」から抜粋した。

山極：重要なのは（勝ち負けの）ディベートではなく、（互いを高め合う）ダイアローグである。しかも、話がどんどん外れていくのは大歓迎。脱線こそ望むところだという議論になれば楽しい。

　山極：人間の一番重要な能力は諦めないということです。動物はできなければ諦めちゃう。人間はしつこいんです。なかなか諦めない。失敗しても諦めない。だから人間は空を飛べるようになったし、海中深く潜れるようになったし、様々な道具を発明して、人間の身体以上のことができるようになった。

　永田：（山極さんが）磊落さのなかに、理学部の匂いがどんと押し寄せてきたのが、私にはなんとも心地よかったのである。自分の知識や考えを単に披露するというのではなく、相手の言葉に反応しつつ自分の考えを紡いでいくという、まさに対話というものの知的興奮とでもいったものを久々に味わった気がした。山極さんの言葉のなかに人との交渉も学問のうちだという名言があったと思うが、そんな交渉の努力なくしては学問、研究自体が成り立たない環境の中で仕事をしてきた人なのだとつくづく感じたのであった。それが山極さんの人間の大きさとなって今を作っているのに違いない。

（大草：我々の当研究会も山極さんが楽しいと言うような「互いを高め合う」議論をしたいものです。脱線も大歓迎し、脱線こそ望むところだという議論をしたいですね。）

　以上